

文部科学省研究開発学校

研究開発実施報告書

平成20年度（第1年次）

研究開発課題

国際社会の中でたくましく生きる子を育てるために、ことばの力と論理的思考力をもとにした「コミュニケーションの力」と、地域での体験をもとに自分を見つめ、生き方を考える「自己の確立を図る力」を育むための小・中一貫した教育課程及び指導方法の研究開発

平成21年3月

とどろみの森学園

箕面市立止々呂美小学校
箕面市立止々呂美中学校

本報告書に記載されている内容は、学校教育法施行規則第55条及び第79条において準用する第55条の規定に基づき、教育課程の改善のために文部科学大臣の指定を受けて実施した実証的研究です。

したがって、この研究内容のすべてが直ちに一般の学校における教育課程の編成・実施に適用できる性格のものでないことに留意してお読みください。

目 次

○ 平成20年度研究開発実施報告(要約)	1
I 本校の概要	
1 施設一体型小・中一貫校に至る経緯	11
2 施設概要と児童生徒数の変化	12
II 研究開発の概要	
1 研究開発課題	13
2 研究開発の概要	13
3 研究開発課題設定の理由	13
4 研究開発の内容	14
(1) 研究の仮説等	
(2) 研究計画	
(3) 教育課程表	
5 研究開発の経緯	17
III 研究開発の内容	
1 コミュニケーション科	18
2 英語活動科	24
3 とどろみタイム	32
IV 研究開発の効果	35
V 実施上の問題点と課題	38

平成20年度研究開発実施報告(要約)

1 研究開発課題

国際社会の中でたくましく生きる子を育てるために、ことばの力と論理的思考力をもとにした「コミュニケーションの力」と、地域での体験をもとに自分を見つめ、生き方を考える「自己の確立を図る力」を育むための小・中一貫した教育課程及び指導方法の研究開発。

2 研究の概要

小・中一貫校としての9年間で国際社会の中でたくましく生きる子を育てることをねらいとする。そのねらいの実現のためには「コミュニケーションの力」と「自己の確立を図る力」が必要と考え、「話すこと・聞くこと」に関わるコミュニケーションの技能と意欲・態度を育てる「コミュニケーション科」、英語に親しみながら異文化との触れあいを通じてコミュニケーション力の基礎を養う「英語活動科」、地域を題材とした多様な体験をもとに地域を見つめ、自己を見つめる意欲、態度を育てる「とどろみタイム」を新設する。

また、基盤となることばの力や論理的思考力を確実に習得するために、国語科や算数・数学科をはじめ、各教科、領域でも「コミュニケーションの力」「自己の確立を図る力」を高めることを意識した教育課程の編成をめざす。

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究仮説

① コミュニケーション科

ある対象からのメッセージが発信される。それを受け取り、自分のフィルターを通して発信する。発信したことに対して、また相手のフィルターを通して新たなメッセージが発信される。コミュニケーションとは、その繰り返しである。コミュニケーションは相手と対話しながら、実は自己との対話を行っているのである。コミュニケーションを進めていくことが、自己を深く見つめていくことにつながっていくと考える。

さまざまなコミュニケーションの形態を体験的に学習することをとおして、コミュニケーションスキルを身につけるとともに、自己との対話が促進され自己理解が深まっていくことをめざしたい。それによりコミュニケーションの特徴に気づき、さまざまな場に応じて対応できる力が育成されるのではないかと考える。

そして、コミュニケーションへの意欲やスキルなど9年間通して培ってきた力を総合的に発揮する場として異年齢の児童・生徒が協働して舞台を作り上げるような学校行事等の工夫を行い、保護者や地域の人々に評価してもらえる取組を設定する。

コミュニケーション力の育成はコミュニケーション科だけではなく、各教科での取組も必要となる。教員のコミュニケーション力も磨かれる必要がある。教員が児童・生徒との「対話」を重視した授業づくりを進め、児童・生徒が授業の中でも他者と関わる機会を増やすことで、人とのよりよい関係を築く力を身につけること

ができる。教員が変わり、授業が変わることで、児童・生徒が変わり、論理的な思考力や表現力を育成することができる。

②英語活動科

小学校から英語活動でネイティブスピーカーと交流することで異文化に触れることの楽しさを学び、異文化や他者とのコミュニケーションを積極的に図る意欲、態度を育てることができる。

また、日本語によるコミュニケーションでは、すでにある人間関係の影響を受け、十分にコミュニケーションを図ることができない場面があるが、英語というツールを使うことで、子どもたちはいつもとは違った表現力やコミュニケーションを發揮することができる。

小学校1～4年生では英語を使った遊びや表現活動を通して、異文化・異言語への興味関心を高めつつ、集団として思い合い、高め合う力を身につける。

小学校5～6年生は英語ノート試作版を元にした教材を活用するとともに、言語としての英語にも触れ、身近なことを表現し、発信することの楽しさを実感し、自分の思いを人に伝える力を身につける。

中学校1～3年生は英語科の学習に加え、英語による会話やメールなどによるコミュニケーション力を活用する技術、意欲を高め、コミュニケーション能力の定着を図る。

③とどろみタイム

今後の多様化、ボーダレス化した国際社会を生きて行くにはアイデンティティの獲得は欠かせない。そのためにも、常に「自己」と「他者」、「地域」、「社会」「未来」を紡ぎ、新たな気づき、発見を積み重ねながら自己の確立を図ることが必要である。

この学習では、「自己」からスタートし、「自己」に戻る、気づき・発見の活動を重視していく。その過程においては当然、課題に対する探究的な活動も必要となるが、ねらいはあくまでも、自分の良さを発見(自尊感情の高まり)し、自分と異なる他者を発見し(他者理解)、自分とつながる社会の未来を発見していくことを通じて、明確な自己の確立をめざすことにある。とりわけ、自分の原風景として地域・とどろみを捉えながら、それぞれの発達の段階において、地域社会のありようと自己をつなぐという現状認識から、国際社会や未来の社会と自己をつなぐ力をはぐくんでいきたい。また、コミュニケーション科や英語活動科で培った力を最大限に生かすことのできるよう、「自己」を起点として、様々な体験と多様な人々との交流の機会を組み合わせ、その都度「自己」を振り返り、「自己」を見つめる活動を通じて、本校のスローガンである「自分発見・ひと発見・未来発見～わくわく体験のびのび失敗 どんどん挑戦～」に基づく取組を推進していく。

(2) 教育課程上の特例

「コミュニケーション科」

小学校1～6年生 35時間程度

中学1～3年生 35時間程度

「英語活動科」

小学校1～2年生 20時間程度

小学校3～6年生 35時間程度

中学校1～3年生 20時間程度

「とどろみタイム」

小学校1～2年生 35時間程度

小学校3～6年生 45～50時間程度

中学校1～3年生 65時間程度

- ・小学校1～2年生……………新たな教科の時間として35時間を創設
- ・小学校3～中学校3年生……新たな教科の時間として35時間を創設し、加えて総合的な学習の時間や選択教科から時間をあてる。

4 教育内容

(1) 教育課程の内容

①コミュニケーション科

A 自己肯定感・人間関係構築力

人間関係づくり、集団づくりを進めるための力を高めることを目的に、スクール・カウンセラーによるアサーション・トレーニング（攻撃的でない自己主張ができるようになる）やストレスへの対応・問題解決トレーニングなどのスキル学習をワークショップ形式などで行った。

B 情報活用力/メディアリテラシー

図書館司書による図書館を活用した情報収集などについての学習や、メールやインターネットの利用に必要なメディアリテラシーの学習を行った。

C 発表力

自分の考えや意見を相手意識を持って論理的に伝えることのできる力を養うため、話し合い、対話スピーチ、討論、プレゼンテーションの方法や効果的な伝え方について学習した。その際、発表するだけにとどまらず、感想や改善点を交流したりすることで、より効果的な発表の仕方や聴き方について学んだ。

D 表現力

イメージや感性を豊かに創造したことを表現することができる力をはぐくむとともに、他者の表現したものを味わう姿勢を養うため、お話、劇、ロールプレイなどさまざまな表現活動に取り組んだ。また、表現ワークショップ（発声や動作等）を行い、表現の方法や空間の利用方法などについて学んだ。

②英語活動科

小学校1～4年生では英語を使ったパズルやタングラムなどの遊びや表現活動を通して、異文化・異言語への興味関心を高めつつ、集団として思い合い、高め合う力を身につけた。

小学校5～6年生は英語ノート試作版を元にした教材を活用するとともに、カレンダーづくりを通じて誕生日を英語で覚えたりして言語としての英語に興味を持たせる工夫をした。

中学生は英語科の進度に合わせて、ALTとの英語によるコミュニケーションを楽しむことを中心に進めた。

スクラップブックを使ったポートフォリオによる評価を行っている。また、スタンプカードや振り返りシートを活用して、楽しく取り組めるよう工夫した。

Cool down 用として英語の絵本を活用している。最後にゆったりとした雰囲気
で絵本を読むことで、ゲームなどの活動で高揚した気持ちを抑えて次の授業へ気
持ちをうまく切り替えることができた。

英語活動部会での検証材料としてビデオクリップづくりに取り組み、指導者側
の振り返りに活用している。

③とどろみタイム

自己を見つめ、生き方を考える「自己の確立を図る力」を育てていくために、新
教科では地域の人々との交流、体験学習を通して社会や地域の良さ、伝統産業を体
験理解する活動などを学習の柱とした。その学習の中で自己の良さ（自己肯定感）
を発揮したり、責任をもって役割を果たすことを通して「社会に参加することの喜
び」「社会で生きている充実感」「社会貢献への喜び」など人としての「生き方」
を学び、考えさせ、感じとらせることが大切であると考えた。

そのため、本校でこれまで総合的な学習の時間に実施してきた内容も考慮し、「生
き方を学ぶ」学習と新たに位置づけ、小・中一貫校として指導方法、教育課程を研
究、開発をしている。

○育てたい力・つけたい力

①コミュニケーション能力に関わること

- ・必要な情報を収集し、分析する力
- ・自分の考えをわかりやすく表現する力

②キャリア教育に関すること（自分自身、他者、社会に関すること）

- ・自分を見つめ、将来を見通す力
- ・地域を見つめ、社会の仕組みを理解する力
- ・友達と協力して課題を解決する力
- ・自分の夢や進路の実現に向け社会活動に参加する力

○小学校1年生から中学校3年生まで一貫した共通の具体的な取組(題材)について

本校では地域の伝統産業である「炭焼き」を総合的な学習の時間に小学校3、
4年生、中学生対象に体験学習をおこなってきた。小・中一貫教育を進めていく
中でこれまでも、小学校の1、2年生の生活科、小学校の総合的な学習の時間、
中学校の総合的な学習の時間に実施する取組を踏まえ継続発展的なつながりにな
るよう考慮してきた。しかし、今回の新教科の研究をするにあたり、小・中9年
間の流れ、つながりをより明確にするために全学年に同じ時期に「炭焼き」を題
材の中心にすえ、地域理解学習として下記のようにカリキュラムを編成し、一部
を除き実施できた。

【1、2年生】2時間

炭盆栽作り（炭盆栽をのせる受け皿の「絵付け」）

【3、4年生】2時間

炭盆栽作り（炭盆栽をのせる受け皿作り「陶芸」）

【5、6年生】

炭盆栽作り（炭盆栽に植えつける植物の採取、栽培）

【7年生】 16時間

炭焼き体験（柴づくり、原木作り、窯入れ、火入れ、窯出し）

【8年生】 2時間

炭盆栽作り

【9年生】 4時間

炭盆栽販売（企画、マーケティング、販売戦略など）

(2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	研究・実践の開始 ○研究開発のめざすものについての全体研究会実施。 ○新設教科設定の基本的な考え方と内容の検討。 ○研究推進体制の検討。 ○コミュニケーション科の観点の検討、教材開発、指導方法の研究・実践。 ○英語活動科のねらいの確認、教材開発、指導方法の研究・実践、評価の研究。 ○とどろみタイムのねらいの確認、他の教科との関連を整理、市移動方法の研究・実践。 ○各教科におけるコミュニケーション力育成についての検討。 ○コミュニケーション力の育成についての研修。 ○ファシリテーションについての研修。

(3) 評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	○全国学力・学習状況調査をコミュニケーションの視点から分析。 ○「児童生徒のストレス状態に関する調査」を全児童生徒について実施。調査結果の分析。 ○英語活動科において、ポートフォリオと振り返りシートの実践。 ○学校協議会において研究開発の取組についての意見を求める。 ○運営指導委員会の実施。

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

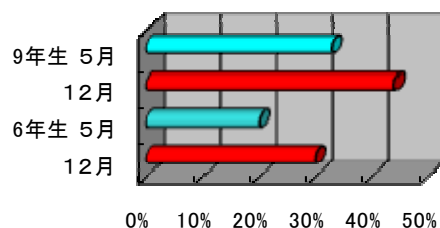
①児童・生徒への効果

コミュニケーション科においては、「人間関係づくり・自己肯定感」「発表力」「表現力」「情報教育・メディアリテラシー」の4つの観点で取組を進めてきた。とりわけ、個と集団の関係性に基づく人間関係づくりの促進と自己肯定感の向上を図ることは、すべての活動の土台となることから、学年はもとより学年を超えた取組、中期後期合同の取組（5年生～9年生等）など様々な場面において多様な活動を展開してきた。その成果の一端は右図に示されており、今後、より系統だったプログラム作りに取り組むことにより、さらに自己肯定感の向上をめざしていきたい。

また、「発表・表現」の観点も、どの教科、領域の活動にもつながるものであり、スピーチ、作文発表会、話し合いや、表現ワークショップ等をおこなってきた。子どもたちの発表・表現することに対する喜びや楽しさなどは、日々の作文や日記等に日常的に表わされている。

英語活動においても1年生から9年生の子ども達が毎回楽しく授業に参加できている。初めて英語に触れる子どもたちもいる中で、ALTや英語活動をコーディネートする英語補助員はもとより、中学校英語科教員と小学校教員の効果的な連携のもと、子どもたちの英語活動に対する意欲・興味関心は大きく高まってきている。

自分にはよいところがあると思いますか



【4年生の作文から】

私は4月とくらべたらとても変りました。どこが変わったかというとなりの大きさは、4月の頃は、とても小さな声だったけど、今では大きな声が出せます。4月の頃は、恥ずかしかったけど、大きな声を出せるようになってから楽しくなってきました。なので、とても英語のある日はわくわくするし、早くしゃべりたいと思ってきます。

……略……

同様に、「とどろみタイム」においても子どもたちは積極的に取り組んでいる。コミュニケーション科や英語活動で培ったスキル等をもとに、異年齢集団による活動等において、年長者は年少者に対する思いやりややさしさをはぐくみながら、「他者に必要とされている自己」（自己有用感）を実感してきている。

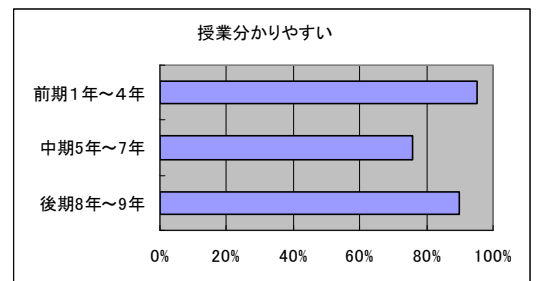
②教職員への効果

本年度研究組織を立ち上げた際に、4研究部会（コミュニケーション部会・英語活動部会・とどろみタイム部会・授業改革部会）を設置し、図書館司書や事務職員

も含む教職員がそれぞれの部会に所属して研究に取り組んできた。幸い本校は管理職4人体制なので、管理職も4部会の一員となり、ともに研究に取り組んだ。加えて4部会の代表者と管理職、校務分掌各部代表者からなる研究推進会議も設置し、部会調整と全体の進捗状況の確認等を行ってきた。

一方で、本校は施設一体型小・中一貫校として平成20年度に新設移転した学校であり、学校運営体制や学校行事等、新たに対応すべき課題も山積しており、加えて従来からの一貫教育の研究も並行して取り組んできたことから、会議や研修の増加、個々の研究の推進と、教職員の負担は確実に増えてきている。しかし、本研究開発が子どもの課題に対応するものであるという認識は共有できており、どの部会においても常に熱心な議論が積み重ねられてきている。

現在、物事を新たに創り出すことの苦しさを味わいながら、約1年間試行錯誤を繰り返してきた中で、ようやく進むべき方向性の確かな手ごたえを教職員一同が実感しているところである。何よりも、小・中学校の教職員が毎回「子どもや学校の現状と課題、そして方向性」を共有するための議論を積み上げることにより、確実に学校総体のベクトルを一つにすることができ、日々の教職員の実践に生かされてきている。例えば、各教科でコミュニケーションを意識した授業づくりや教材づくりが盛んに行われるようになり、子ども相互の交流を軸とした、わかりやすい授業が展開されてきている。



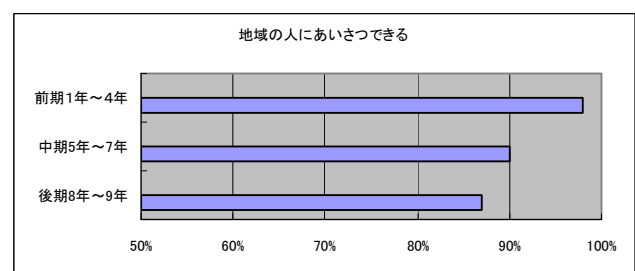
具体的には、

- ア 教科ごとにコミュニケーション科の4観点に基づく一貫カリキュラム素案の作成
- イ 交流を意識した授業づくり：話し合い、討論→模擬裁判での意見交流 KJ法による意見調整
- ウ ICTを活用した授業づくり：体育等で他者の演技や活動をみての意見交流
- エ 横断的合科的な授業づくり：俳句づくりにおいて、自分で撮影した映像をPCで編集、発表

など、各教科においてもコミュニケーションと自己の確立を意識した授業が実践されてきており、研究開発における新しい教科づくりだけでなく、教育活動全般にわたる波及効果ができているととらえている。

③保護者等への効果

保護者には学校便りや学年通信等を通じて研究開発学校として取り組む方向性や具体的な内容を周知するとともに、ゲストティチャーや学校支援のサポーターとして様々な活動に参画いただいている。その際、子ども



との対話、マナー等コミュニケーションを意識した対応をお願いしたり、意識したお話や活動の展開にご協力をいただいている。また、日常的な「見守り活動」においてもあいさつや声かけ等地域全体にお願いし、子どもたちのコミュニケーション力を高めるためにご協力をいただいている。加えて、本年度PTA活動においても「コミュニケーション」を意識した取組を実施することになり、新たにスポーツを通じた交流や自然体験活動親子交流など、学校と同調した取組の展開を進めていただいている。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

- ① 小・中一貫した9年間の教育課程を編成するうえで、発達段階に応じた課題や教材の配置になっているかの検証が必要。
- ② ポートフォリオ評価を活用する。また、より有効な評価方法を研究する。
- ③ コミュニケーション科で学んだことが他教科で活用できるような有機的な運用方法を考えていく。
- ④ コミュニケーション科のスキル学習について、教職員がさまざまなスキル学習に対応できるように研修の機会を設ける。
- ⑤ 英語活動科ではHRT（学級担任）主体で授業を進めていける状況にする。
- ⑥ 英語活動科の教材を蓄積、整理し、誰でも、いつでも使える体制にする。
- ⑦ とどろみタイムではこれまでの取組を整理し、地域に根ざし、コミュニケーション力を高めることをめざしたより有効な内容を検討する。
- ⑧ 効果測定を継続的、意識的に行う。
- ⑨ 他教科の授業も教員と児童・生徒とのコミュニケーションを大切にした授業になるよう研鑽を積む。
- ⑩ これまでの少人数から確実に人数が増える中での取組となるが、一人ひとりを大切にしてきたこれまでの姿勢を崩すことなく、新しい状況に対応できる体制や教材づくりを進める。
- ⑪ 保護者や地域への情報発信をより積極的に行い、理解、協力を得て研究を進める。

箕面市立止々呂美小・中学校教育課程表（平成20年度）

止々呂美小学校	各教科の授業時数									道徳	特別活動	総合的な学習の時間	とどろみタイム	英語活動科	コミュニケーション科	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育							
1学年	252 (-20)		114		68 (-34)	68	68		90	34	34		34 (+34)	20 (+20)	34 (+34)	816 (+34)
2学年	260 (-20)		155		70 (-35)	70	70		90	35	35		35 (+35)	20 (+20)	35 (+35)	875 (+35)
3学年	235	70	175 (+25)	70		60	60		90	35	35	0 (-105)	45 (+45)	35 (+35)	35 (+35)	945 (+35)
4学年	235	85	175 (+25)	90		60	60		90	35	35	0 (-105)	45 (+45)	35 (+35)	35 (+35)	980 (+35)
5学年	180	90	175 (+25)	95		50	50	60	90	35	35	0 (-110)	50 (+50)	35 (+35)	35 (+35)	980 (+35)
6学年	175	100	175 (+25)	95		50	50	55	90	35	35	0 (-110)	50 (+50)	35 (+35)	35 (+35)	980 (+35)
計	1337 (-40)	345	969 (+100)	350	138 (-69)	358	358	115	540	209	209	0 (-430)	259 (+259)	180 (+180)	209 (+209)	5576 (+209)

止々呂美中学校	各教科の授業時数									道徳	特別活動	総合的な学習の時間	とどろみタイム	英語活動科	コミュニケーション科	選択	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭	英語								
中学校1学年	140	105	105	105	45	45	90	70	105	35	35	0 (-84)	64 (+64)	20 (+20)	35 (+35)	16	1015 (+35)
中学校2学年	130 (+25)	105	125 (+20)	105	35	35	90	70	105	35	35	0 (-105)	64 (+64)	20 (+20)	35 (+35)	26 (-24)	1015 (+35)
中学校3学年	140 (+35)	105 (+20)	140 (+35)	105 (+25)	35	35	90	35	105	35	35	0 (-130)	64 (+64)	20 (+20)	35 (+35)	36 (-69)	1015 (+35)
計	410 (+60)	315 (+20)	370 (+55)	315 (+25)	115	115	270	175	315	105	105	0 (-319)	192 (+192)	60 (+60)	105 (+105)	78 (-93)	3045 (+105)

学校等の概要

1 学校名、校長名

とどろみの森学園

箕面市立止々呂美小学校

箕面市立止々呂美中学校

校長名 樋口弘造

2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地：大阪府箕面市森町中1-23-14

電話番号：072-739-0378

FAX番号：072-739-2560

3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

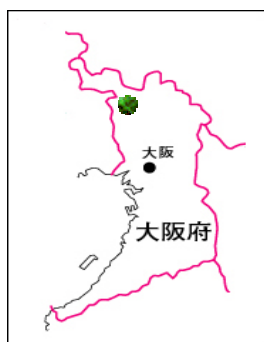
	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
	児童 生徒 数	学 級 数	児童 生徒 数	学 級 数	児童 生徒 数	学 級 数	児童 生徒 数	学 級 数	児童 生徒 数	学 級 数	児童 生徒 数	学 級 数	児童 生徒 数	学 級 数
止々呂美 小学校	16	1	10	1	10	1	7	(1)	7	1	7	(1)	57	4
止々呂美 中学校	8	1	6	1	9	1							23	3

4 教職員数

	校長	教頭	教諭	養護教諭	常勤講師	非常勤講師	ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計	
止々呂美 小学校	1	1	15	1	1	1	1	1	1	1	30	
		1										
止々呂美 中学校		1		1	0	2						1

I 本校の概要

1 施設一体型小中一貫校に至る経緯



止々呂美地域は、大阪府北部の山間部に位置し、水と緑の豊かな自然に恵まれた地域である。しかし、年々過疎化に伴う少子・高齢化が進む中、止々呂美地域西部の山間地を開発することにより地域の活性化を図ろうとする動きが大きくなり、平成7年、大阪府において「水と緑の健康都市」づくりを進める計画が具体的に進みだした。

その後、表に示す経緯を経て、平成19年10月に水と緑の健康都市「箕面森町(みのおしんまち)」がまち開きし、現在もさらに開発が進められているところである。

一方、箕面市、とりわけ止々呂美地域においては、新しいまちづくりを進めるための協議が幾度となく行われ、既存の止々呂美小・中学校をどのように位置づけるのかが大きな課題となっていた。最終的に、長年地域の学校として親しまれてきた止々呂美小・中学校は、将来的に箕面森町の人口増加に対応しきれないということから、新築移転することになり、旧小・中学校の特色を生かしつつ、小中一貫教育の推進を柱として取り組んでいくことになった。

そして、平成15年度以降、府や国の様々な事業を活用して一貫教育の研究を積み重ね、平成20年4月、府内公立学校で初めてとなる施設一体型小・中一貫校「とどろみの森学園」として新たなスタートを迎えるに至った。

H7(1995)年	水と緑の健康都市計画決定	
H10(1998)年	一部造成工事着手 オオタカ営巣確認	
H12(2000)年	オオタカ調査委員会設置	
H13(2001)年	事業見直し案公表	
H15(2003)年	都市計画の変更→府市基本協定書	府教育委員会「明日を拓く学校づくり推進事業」
H16(2003)年	造成事業等再開	府教育委員会「小・中一貫教育推進事業」
H17(2005)年	第一期整備等事業(PFI)契約	府教育委員会「小・中一貫教育推進事業」
H19(2007)年	学校建築工事起工(4月)	文部科学省「小学校英語活動等国際理解活動推進事業」
〃	箕面有料道路(グリーンロード)開通(5月)	府教育委員会「子どもの未来ハートフルプロジェクト」
〃	箕面森町まちびらき(10月)	推進事業
H20(2008)年	竣工式・校舎お別れ式(3月)	文部科学省「研究開発学校指定」
〃	とどろみの森学園開校	文部科学省「学校支援地域本部事業」



特認校制度を活用して、箕面市内から13人の小中学生が、バスで通学しています。
小学生が中学生のおねえちゃんに手をつないでもらって……
小中一貫校ならではの姿です。

2 施設概要と児童生徒数の変化

(1) 施設概要

* 敷地面積（平坦部分） 32,500 m²（内 2,000 m²は幼保用地）

* 施設概要

・校舎棟

鉄筋コンクリート2階建

普通教室13クラス（開校時）

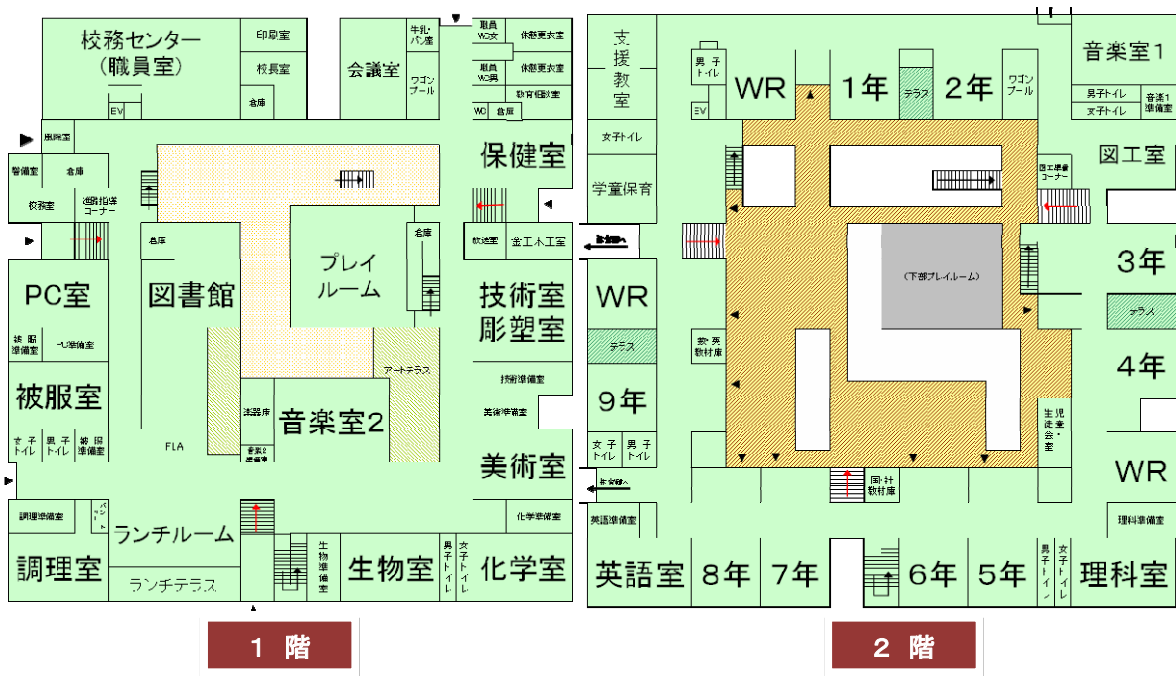
特別教室、管理室等 約 6,500 m²

・アリーナ棟 約 1,480 m²

・プール棟 約 1,000 m²

・運動場 大 約 9,000 m²

小 約 4,000 m²（内 2,000 m²は将来の幼保用地）



(2) 児童生徒数の変化

旧止々呂美小・中学校

とどろみの森学園 4月

平成 21 年 2 月末現在 計 80 人



平成 19 年度 (2007 年度)	
小学生	15 人
中学生	17 人
合計	32 人

平成 20 年度 (2008 年度)	
小学生	43 人
中学生	21 人
合計	64 人

	止々呂美	特認	森町	計
1 年	1	4	11	16
2 年	2	0	8	10
3 年	4	2	4	10
4 年	1	1	5	7
5 年	1	3	3	7
6 年	4	0	3	7
小学校計	13	10	34	57
7 年	1	2	5	8
8 年	4	0	2	6
9 年	7	1	1	9
中学校計	12	3	8	23
総計	25	13	42	80

II 研究開発の概要

1 研究開発課題

国際社会の中でたくましく生きる子を育てるために、ことばの力と論理的思考力をもとにした「コミュニケーションの力」と、地域での体験をもとに自分を見つめ、生き方を考える「自己の確立を図る力」を育むための小・中一貫した教育課程及び指導方法の研究開発。

2 研究開発の概要

小・中一貫校としての9年間で国際社会の中でたくましく生きる子を育てることをねらいとする。そのねらいの実現のためには「コミュニケーションの力」と「自己の確立を図る力」が必要と考え、「話すこと・聞くこと」に関わるコミュニケーションの技能と意欲・態度を育てる「コミュニケーション科」、英語に親しみながら異文化との触れ合いを通じてコミュニケーション力の基礎を養う「英語活動科」、地域を題材とした多様な体験をもとに地域を見つめ、自己を見つめる意欲、態度を育てる「とどろみタイム」を新設する。

また、基盤となることばの力や論理的思考力を確実に習得するために、国語科や算数・数学科をはじめ、各教科、領域でも「コミュニケーションの力」「自己の確立を図る力」を高めることを意識した教育課程の編成をめざす。

3 研究開発課題設定の理由

都市化、少子化の進行に伴い、人間相互の交流や関わりが減少し、子どもの社会性や人間関係力の低下が指摘されている。一方、国際化、情報化が進展する中、異文化の理解や外国語の力、メディアリテラシーへの対応が課題となってきている。

本校は、現在開発中の新しい住宅地を校区に加え、平成20年4月に施設一体型小・中一貫校として新設移転し、新たなスタートを迎えた。また、「特認校制度」により市内から本校への転入学を希望する児童・生徒も受け入れており、在籍児童・生徒数は急増している。つまり、これまでから在籍していた既存地区の児童・生徒にとっても、新たに転入してきた児童・生徒にとっても、スムーズに学校生活を送るためには、互いに自分の気持ちや考えを伝え合うコミュニケーションの力が必要となってきている。

また、児童生・徒の保護者にとっても、既存の地域と新しいまちの人々とのコミュニケーションを図りながら新しい地域づくりを進めることが課題となる。そうした中、学校で共に生活する子どもたちが地域の人たちの架け橋になり、新しいコミュニティーを作り出す原動力になってほしいと考えている。子どもにとっては友だちだけでなく地域の多様な人々とのコミュニケーションの機会が増え、それに対応する力が求められる。

コミュニケーションの力は、国際化、情報化が進むこれからの社会で、多様な価値観や考えの人たちと共に子どもたちが「国際社会の中でたくましく生きていく」ためには不可欠の力である。コミュニケーションは、他者と自分の考えを紡ぎあわせる行為であり、コミュニケーションを通してより深く考え、判断し、自分の人生を切り拓いていく力を育成することが求められる。

本研究では、国語科、算数・数学科でコミュニケーションの基盤となることばの力と論理的思考力を育成し、「英語活動科」「コミュニケーション科」「とどろみタイム」を新設することで「国際社会の中でたくましく生きる力をはぐくむ」ために必要なコミュニケーションの力と自己を確立する力を育成するための小・中9年間を見通した教育課程と指導方法の研究を目的とする。

4 研究開発の内容

(1) 研究の仮説等

① コミュニケーション科

ある対象からのメッセージが発信される。それを受け取り、自分のフィルターを通して発信する。発信したことに対して、また相手のフィルターを通して新たなメッセージが発信される。コミュニケーションとは、その繰り返しである。コミュニケーションは相手と対話しながら、実は自己との対話を行っているのである。コミュニケーションを進めていくことが、自己を深く見つめていくことにつながっていくと考える。

さまざまなコミュニケーションの形態を体験的に学習することをとおして、コミュニケーションスキルを身につけるとともに、自己との対話が促進され自己理解が深まっていくことをめざしたい。それによりコミュニケーションの特徴に気づき、さまざまな場に応じて対応できる力が育成されるのではないかと考える。

そして、コミュニケーションへの意欲やスキルなど9年間通して培ってきた力を総合的に発揮する場として異年齢の児童・生徒が協働して舞台を作り上げるような学校行事等の工夫を行い、保護者や地域の人々に評価してもらえ取る取組を設定する。

コミュニケーション力の育成はコミュニケーション科だけではなく、各教科での取組も必要となる。教員のコミュニケーション力も磨かれる必要がある。教員が児童生徒との「対話」を重視した授業づくりを進め、児童・生徒が授業の中でも他者と関わる機会を増やすことで、人とのよりよい関係を築く力を身につけることができる。教員が変わり、授業が変わることで、児童・生徒が変わり、論理的な思考力や表現力を育成することができる。

② 英語活動科

小学校から英語活動でネイティブスピーカーと交流することで異文化に触れることの楽しさを学び、異文化や他者とのコミュニケーションを積極的に図る意欲、態度を育てることができる。

また、日本語によるコミュニケーションでは、すでにある人間関係の影響を受け、十分にコミュニケーションを図ることができない場面があるが、英語というツールを使うことで、子どもたちはいつもとは違った表現力やコミュニケーションを発揮することができる。

小学校1～4年生では英語を使った遊びや表現活動を通して、異文化・異言語への興味関心を高めつつ、集団として思い合い、高め合う力を身につける。

小学校5～6年生は情報機器の活用まで学習を広げ、ビデオレターなどを使って海外との交流活動などに取り組み、異文化と触れ合うことの楽しさや、身近なことを表現し、発信することの楽しさを実感し、自分の思いを人に伝える力を身につける。

中学校1～3年生は英語科の学習に加え、英語による会話やメール、ビデオレターなどによるコミュニケーション力を活用する技術、意欲を高め、コミュニケーション能力の定着を図る。

③ とどろみタイム

今後の多様化、ボーダレス化した国際社会を生きて行くにはアイデンティティーの獲得は欠かせない。そのためにも、常に「自己」と「他者」、「地域」、「社会」「未来」を紡ぎ、新たな気づき、発見を積み重ねながら自己の確立を図ることが必要である。

この学習では、「自己」からスタートし、「自己」に戻る、気づき・発見の活動を重視していく。その過程においては当然、課題に対する探究的な活動も必要となるが、ねらいはあくまでも、自分の良さを発見(自尊感情の高まり)し、自分と異なる他者を発見し(他者理解)、自分とつながる社会の未来を発見していくことを通じて、明確な自己の確立をめざすことにある。とりわけ、自分の原風景として地域・とどろみを捉えながら、それぞれの発達段階において、地域社会のありようと自己をつなぐという現状認識から、国際社会や未来の社会と自己をつなぐ力をはぐくんでいきたい。また、コミュニケーション科や英語活動科で培った力を最大限に生かすことのできるよう、「自己」を起点として、様々な体験と多様な人々との交流の機会を組み合わせ、その都度「自己」を振り返り、「自己」を見つめる活動を通じて、本校のスローガンである「自分発見・ひと発見・未来発見～わくわく体験のびのび失敗 どんどん挑戦～」に基づく取組を推進していく。

(2) 研究計画

	研究内容等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ① 3年間を見通した研究計画及び研究組織の編成。 ② 研究の方向、研究内容、研究方法の明確化と共通理解。 ③ コミュニケーション力の育成を意図した各教科、領域の教育活動内容の分析。 ④ 新教科の9年間一貫したカリキュラム作成。 ⑤ 児童・生徒、教職員、保護者に対するアンケート調査によるコミュニケーション力定着の把握と分析。 ⑥ 学校協議会、運営指導委員会による評価をもとにした、第1年次のまとめと第2年次の計画作成。
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ① 第1年次の評価及び課題についての検証。 ② 研究の方向、研究内容、研究方法の修正。 ③ 新教科及び各教科、領域の研究授業を通しての教材開発と検証。 ④ 児童・生徒、教職員、保護者に対するアンケート調査や卒業生進学先高等学校からの情報収集によるコミュニケーション力定着の把握と分析。 ⑤ 学校協議会、運営指導委員会による評価をもとにした、第2年次のまとめと第2年次の計画作成。 ⑥ 公開研究発表会(中間報告)の実施。
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ① 第2年次の評価及び課題についての検証。 ② 研究の方向、研究内容、研究方法の検証と修正。 ③ 新教科及び各教科、領域の研究授業を通しての教材の検証と修正。 ④ 児童・生徒、教職員、保護者、地域に対するアンケート調査や卒業生進学先高等学校からの情報収集によるコミュニケーション力定着の把握と分析。 ⑤ 第3年次のまとめ。(成果と課題) ⑥ 公開研究発表会(研究結果報告)の実施。 ⑦ 研究成果を各教科へ還元する方策の提示。

(3) 教育課程

箕面市立止々呂美小・中学校教育課程表（平成20年度）

止々呂美小学校	各教科の授業時数									道徳	特別活動	学 習 的 な 総合的 時間	と ど ろ み タ イ ム	英 語 活 動 科	コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 科	総 授 業 時 数
	国 語	社 会	算 数	理 科	生 活	音 楽	図 画 工 作	家 庭	体 育							
1 学年	252 (-20)		114		68 (-34)	68	68		90	34	34		34 (+34)	20 (+20)	34 (+34)	816 (+34)
2 学年	260 (-20)		155		70 (-35)	70	70		90	35	35		35 (+35)	20 (+20)	35 (+35)	875 (+35)
3 学年	235	70	175 (+25)	70		60	60		90	35	35	0 (-105)	45 (+45)	35 (+35)	35 (+35)	945 (+35)
4 学年	235	85	175 (+25)	90		60	60		90	35	35	0 (-105)	45 (+45)	35 (+35)	35 (+35)	980 (+35)
5 学年	180	90	175 (+25)	95		50	50	60	90	35	35	0 (-110)	50 (+50)	35 (+35)	35 (+35)	980 (+35)
6 学年	175	100	175 (+25)	95		50	50	55	90	35	35	0 (-110)	50 (+50)	35 (+35)	35 (+35)	980 (+35)
計	1337 (-40)	345	969 (+100)	350	138 (-69)	358	358	115	540	209	209	0 (-430)	259 (+259)	180 (+180)	209 (+209)	5576 (+209)

止々呂美中学校	各教科の授業時数									道徳	特別活動	学 習 的 な 総合的 時間	と ど ろ み タ イ ム	英 語 活 動 科	コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 科	選 択	総 授 業 時 数
	国 語	社 会	数 学	理 科	音 楽	美 術	保 健 体 育	技 術 家 庭	英 語								
中学校 1 学年	140	105	105	105	45	45	90	70	105	35	35	0 (-84)	64 (+64)	20 (+20)	35 (+35)	16	1015 (+35)
中学校 2 学年	130 (+25)	105	125 (+20)	105	35	35	90	70	105	35	35	0 (-105)	64 (+64)	20 (+20)	35 (+35)	26 (-24)	1015 (+35)
中学校 3 学年	140 (+35)	105 (+20)	140 (+35)	105 (+25)	35	35	90	35	105	35	35	0 (-130)	64 (+64)	20 (+20)	35 (+35)	36 (-69)	1015 (+35)
計	410 (+60)	315 (+20)	370 (+55)	315 (+25)	115	115	270	175	315	105	105	0 (-319)	192 (+192)	60 (+60)	105 (+105)	78 (-93)	3045 (+105)

5 研究開発の経緯

月	日	会 議 (内 容)
4月	9	研究推進会議 (全体方針、研究組織検討)
	28	職員会議 (全体方針、研究組織)
5月	7	研究推進会議
	14	全体研究開発説明会、4研究部会
6月	4	研究推進会議
	18	4研究部会
	25	職員会議 (各部会報告)
7月	1	研究推進会議
	11	4研究部会
8月	8	全員研究推進会議 (各部会報告、今後の方針)
	28	研究推進会議
9月	10	研究推進会議
	22	4研究部会
	25	職員会議 (英語活動、授業改革研修報告)
10月	20	4研究部会
	29	研究推進会議
11月	17	4研究部会
	19	研究推進会議
	26	職員会議 (コミュニケーション科カリキュラムについて)
12月	8	4研究部会
	10	研究推進会議
1月	19	4研究部会
	27	職員研修 (カウンセリング・コミュニケーションについて)
	27	研究開発運営指導委員会
	28	研究推進会議
2月	9	4研究部会
	12	研究推進会議
3月	2	4研究部会
	16	4研究部会 (1年間のまとめ、次年度に向けて)
	18	全員研究推進会議 (1年間のまとめ、次年度に向けて)
	24	職員研修 (ファシリテーションについて)

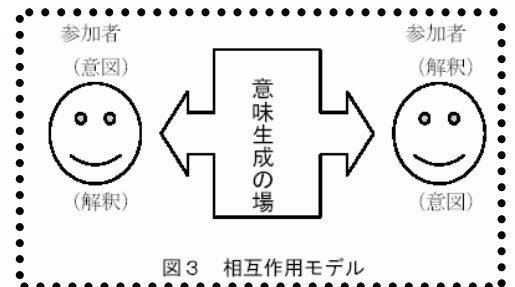
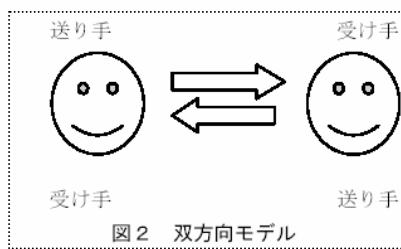
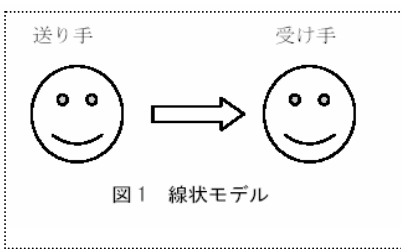
Ⅲ 研究開発の内容

1 コミュニケーション科

1 目標

子どもたちが「表現したい」「伝えたい」と思い、また他の人の伝えようとするを「わかりたい」と思って受け止め、その互いの関係性の中で響き合い高め合っていくことを目標に、コミュニケーション能力の育成をめざす。

なお、ここでいう「コミュニケーション」とは双方向のものであるだけでなく、コミュニケーションの「場」に参加した人が相互作用を通じて意味を作り出す過程であるということをも前提に研究を進めていくものとする。また、学習したことや活動したことの共有・振り返りの時間を大切にしていきたい。



(モデル図は村松健一「国語科におけるコミュニケーション能力の育成—音声言語教育の現状と課題—」
「言語文化と日本語教育」2002年5月特集号による)

2 研究の経過 ～子どもの現状分析から、めざすコミュニケーション力を探っていこう！～

子どもの現状は？(学力状況調査質問用紙から)

- 失敗を恐れずに挑戦する
 - 人が困っているときに助けるか
 - 自分にはよいところがあると思うか
- 以上の点についての意識を高めていきたい

つけたい力は？(夏の校内全体研修から)

- <まとめる力><伝える力><表現する力>
 - <自尊感情><対人関係><スキルの獲得>
- 以上の力を発達段階ごとに流れをもってつけていきたい
※スキルは手段であって目的ではない

★<実践>と<研究>の二本の柱で研究を進めていこう！

今までやってきたことをベースに
コミュニケーション科の中身を組
み立てていく。
意味づけ
検証
実践 など

実践例や研究論文に学ぶなどして、
とどろみの森学園のコミュニケー
ション科が取り組んでいこうとす
ることの理論づけを行う。
資料集め・読み合わせ など
研究

35時間をどう運用するか？
小・中9年間のカリキュラム
表づくりも考えよう。

コミュニケーション科

教科学習や行事、英語活動科、
とどろみタイム(総合的な学習
の時間)などの学校生活のあら
ゆる場面でコミュニケーショ
ン力の育成を意識して取り組
んでいこう。

**コミュニケーション力の育成において、学校生活のいろいろな場面や機会を活用し、
今やっていることを生かしていこう！**

3 具体的な取組

①観点表の作成

各学年とも年間 35 時間のカリキュラムを編成していくにあたって、コミュニケーション科として伸ばしたい力・つきたい力を以下のように四つの観点として設定し、学年ごとのねらいや目標を設定することにした。またこの観点表はコミュニケーション科の時間だけでなく、他教科や総合的な時間など、学校全体でコミュニケーション力の育成を意識した学習活動や取り組みの内容を考えていくときのベースとなるものものとしていきたい。

A 自己肯定感・人間関係構築力

一人ひとりの子どもの自尊感情を高め、安心して自分を表現することのできる居場所づくり・人間関係づくり・集団づくりを大切にしていきたい。そのために必要なソーシャル・スキル・トレーニング(社会で生きていく上で必要なスキル)やアサーション・トレーニング(攻撃的でない自己主張ができるようになる)、その他のスキル・トレーニング(例 ストレスへの対処・問題解決スキルなど)のプログラムを、学年に応じてカリキュラムに取り入れていく。

B 情報活用力/メディア・リテラシー

図書館の資料やインターネットを駆使して必要な情報を収集し、適切に活用する力、情報をより有効に発信する力の育成をめざすとともに、メディア・リテラシーに対する認識を深める。そのために必要な図書館教育及び情報教育の9年間の学習プログラムを適宜取り入れる。

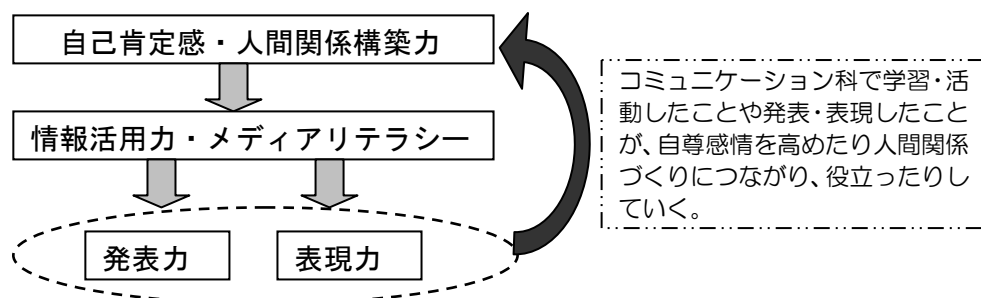
C 発表力

「話す・聞く・話し合う」ことの学習を土台に、自分の考えや意見などを相手意識をもって論理的に伝えることのできる力を養う。そのための具体的な取組として、話し合い・対話・スピーチ・討論・ディベート・プレゼンテーションなどのさまざまな活動を学年に応じて取り入れていく。また、より有効な発表の仕方や聴き方などについても学ぶ機会をもつ。

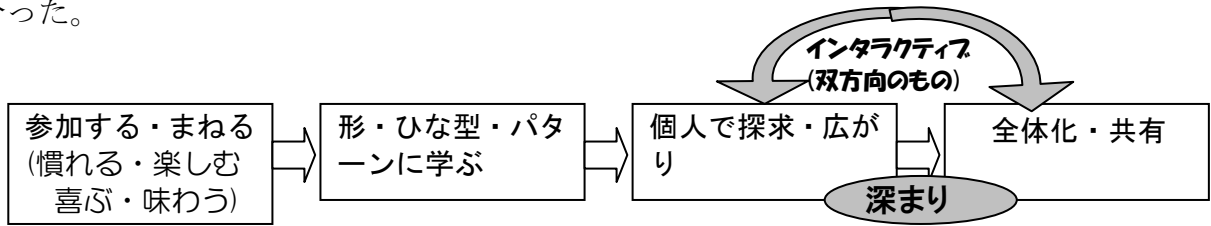
D 表現力

イメージや感性を豊かに、創造したことを表現することのできる力を育むとともに、他の人の表現したものを楽しみ、味わう姿勢を養う。そのためにイメージや表現力を豊かにするトレーニングやワークショップをカリキュラムに取り入れる。また、さまざまな創作活動(お話・劇の台本づくり、詩・俳句・短歌・紀行文の創作など)、ことば・音声・身体による表現活動に取り組む。

また、四つの観点の関係を以下のように考えた。



さらに活動を組み立てるにあたって、以下のような流れも意識していきたいと話合った。



観点表やカリキュラムの作成にあたって

小・中9年間のつながりや流れを大切に、カリキュラムを考えていこう。

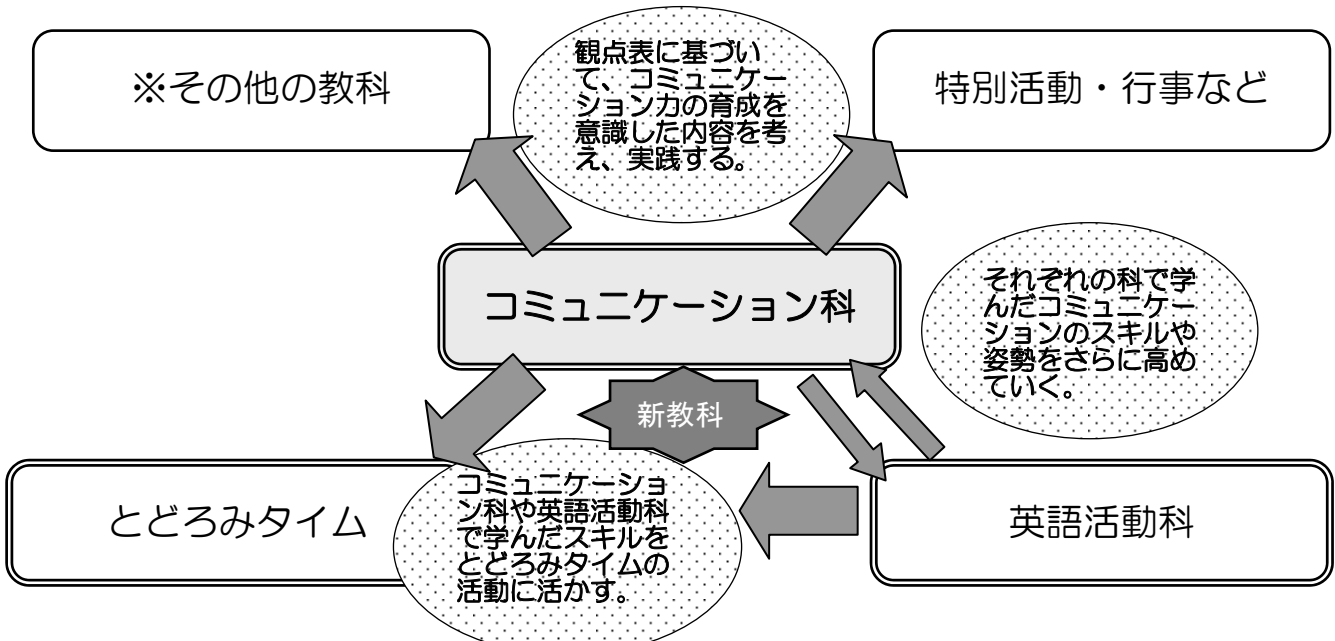
各教科や取組の中でやってくるコミュニケーション科として、カリキュラムを考えていこう。

コミュニケーション科で培った力が、教科学習・総合的な学習の時間・特別活動・学校行事・見学会・生徒会活動・学校生活において意識して活用できるようにしていこう。

テーマ	1年	2年	3年	4年	8年	9年
自己肯定感 人間関係構築力						
情報活用能力 メディア・リテラシー						
発表力						
表現力						

他校の研究発表会に参加したことを学校全体で交流・共有し、カリキュラムづくりの参考にしていこう。

コミュニケーション科とその他の教科・領域との関係



※その他の教科についてはコミュニケーション力の育成に関連のある学習内容を取り出して表にまとめた。

③評価について

評価については、文章表記による評価を検討中である。

そのためにも「ふりかえりシート」や感想文、ポートフォリオなど、児童・生徒一人ひとりのコミュニケーション力の変化や成長をしっかりと捉えられるものを資料としてきちんと残し、評価に活かしていきたい。また、子ども・保護者・教職員の意識を把握し、課題と成果を明らかにしていくためにもアンケートを実施し、具体的なデータを収集することも必要であると考えている。

4 今年度の活動内容(実践)から

(コミュニケーション科として、またはコミュニケーション力の育成を意識した授業として今年度取り組んだことから)

・ **小学校スピーチ大会**

3～6年生による合同国語「スピーチ大会」を実施し、各学年の学習目標にあわせて「話す」「聞く」活動を行い、最後に「感想カード」を交換した。



・ **中学校国語科研究授業「中学生のための話し合い入門」**

7～9年生による合同授業を実施し、話し合いの「こつ」を発見し、自分たちの話し合いの活動に活かしていくことをめざした。



・ **中学校数学科研究授業**

8年生の「証明」の単元で、論理的に思考し説明する力の育成を意識した研究授業が5回に渡って行われた。



・ **中学校表現ワークショップ**

文化フェスタでの劇の発表にむけて、演劇のワークショップをコミュニケーション科の授業として行った。

・ **合同保健(喫煙防止教育)**

5～9年生による小・中合同保健の授業の中で、調べ学習の仕方と有効なまとめ方についての学習を行った。また、人から誘いを受けたときの断り方として、スクール・カウンセラーからアサーションスキルを学ぶ機会を設けた。



・ **中学校全体道徳**

中学校の全体道徳で、「話す」ときに「わたし・メッセージ」で話すことの大切さ(11月)や思いやり(1月)について、それぞれグループワークなどを行い、各自が考えたことを交流・共有する機会をもった。

・ **中学校「おはなし会」**

地域で読書活動推進活動をされておられる方々をゲストティーチャーにお招きして「おはなし会」を開催し、生徒たちが素話や絵本の読み語り、紙芝居の上演など、ことばを通じた多様な表現の世界を楽しんだ。中学生は職場体験や技術・家庭科の保育実習、委員会活動などで年下の子どもたちに読み語りや紙芝居をすることもあり、自分たちがお話の豊かな世界にふれるとともに、表現者としての効果的な表現方法についても学ぶよい機会となった。



5 今後に向けて

学校全体としてコミュニケーション力を育ていけるように、他の教科や領域との連携をしっかりと図っていくことが大切であると考えている。そのためにもコミュニケーション科がその発信の場としての役割を十分に担えるようなカリキュラムの提案に努めていきたい。

2 英語活動科

<研究主題> **小・中一貫英語活動・英語科カリキュラムの編成とその実践**

■研究の進め方

構成メンバーと活動

- ・アドバイザー : 姫路獨協大学 池田真生子先生
- 中学校英語担当者 3名 ALT 小学校各担任 4名
- 英語活動補助者 : 真田恵美子先生
- 管理職
- 箕面市教育センター指導主事
- ・月1度部会を開催
- ・小学校外国語活動中核教員として、府・市の各研修及び、部会に参加

■研究の経過

【1】小・中一貫英語活動カリキュラムの編成に向けて、目指したいカリキュラムの概要を次のように設定した。

英語活動のねらい

- 外国語を通して、言語や文化に対する理解を深める。
- 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
- 聞くこと・話すことなどの、実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。

子どもたちにつけたい力

- ◆自分から進んでコミュニケーションを図ろうとする態度
- ◆広い視野をもち、異文化を理解し尊重する態度、異文化と共生できる資質・能力
- ◆聞くこと・話すことを中心として、主体的に発信するコミュニケーション能力

止々呂美小・中学校のカリキュラムの特徴

- ◇小学校1年生から中学校3年生の9年間の活動を行う。
- ◇異年齢集団による英語活動を通して、相互コミュニケーションの深化を図る。

各期の重点指導事項

小学校1・2・3・4年生	小学校5・6年生、中学校1年生	中学校2・3年生
基礎・基本の定着、反復 具体的なモノで考える時期	基礎・基本の徹底 具体から抽象への移行期	基礎・基本の応用、個性の伸長 抽象的思考の時期
英語によるコミュニケーションに慣れ、親しむ。 ○ 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむ。 ○ 外国語と日本語の違いを知り、ことばのおもしろさや豊かさに気付く。 ○ 外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図る楽しさを知る。	英語によるコミュニケーション力を身に付ける。 ○ 日本と外国との生活・習慣・行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付く。 ○ 言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知る。 ○ 異文化交流を体験し、理解を深める。	英語によるコミュニケーション力を活用する。 ○ 外国語を通して、言語や文化に対する理解を深める。 ○ 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。 ○ 聞く・話す・読む・書くなどの言語活動においてバランスのとれたコミュニケーション力の基礎を習得する。

【2】活動内容

前期（1～4年生）に於いては、1・2年生合同クラスで年間20時間、3・4年生合同クラスで年間35時間の授業を行い、中期（5～7年生）・後期（8・9年生）に於いては、それぞれの学年で年間35時間の計画で授業を行っている。各授業には、各クラス担任（7～9年生は教科担任）・ALT・英語活動補助者で進めている。

本年度当初に、英語活動部会で話し合いを持ち以下の目標設定をした。

- ①各学年のカリキュラムを作る。
- ②徐々に担任の役割を増やし、年度末には担任主体で授業を進めていく状況を作る。
- ③各授業の指導案を作成し、次年度以降へ繋げていく。
- ④評価について、研究し指導に役立てる。
- ⑤視聴覚教材を開発・蓄積し誰でもいつでも使える状況を作る。

①カリキュラムについて

☆1・2年生及び3・4年生については、英語活動補助者の真田先生を中心にカリキュラムづくりに取り組み、各単元3～4時間のUnitで構成されたものができあがっている。各単元の最後のところで、Taskを入れ、子どもたちが自分で作り上げたものを元にコミュニケーション活動をしていくような設定をしている。

☆5・6年生については、英語ノート試作版を元にカリキュラムを作っているが、子どもの実態に合わせ、Warm up・Cool downのところで別教材を入れている。

☆7～9年生については、教科書の進度に合わせてコミュニケーション活動に重点を置いてカリキュラムを作っている。

②担任主体の授業を目指して

1学期前半は、担任と真田先生による授業で進められ、真田先生主導で進められた。

1学期後半から、ALTが加わり、2学期前半までは、真田先生主導で進んでいたが、以後徐々に担任の役割を増やし3学期からは、ほぼ担任とALTが授業を進めている。多忙な毎日の中で打ち合わせの時間も十分とれていないが、担任とALTの息も合ってきて、授業がスムーズに流れるようになってきた。

③指導案の作成

1～4年生については、真田先生原案の指導案をもとに、各担任と英語科教諭で打ち合わせを行い、5・6年生については各担任と英語科教諭で打ち合わせを行っているが、3学期からは真田先生の原案ですすめている。

7～9年生については、英語科教諭が作成している。

特に小学校については、年間を通して指導案を作成し、それを元に授業を進めてきたので、次年度の授業にも大いに助けになると思っている。また、各指導案は校内PCの共有のフォルダにも納められており、いつでも誰でも見られるようにしている。

④評価について

夏の校内研修で、アドバイザーの池田先生より2学期以降の評価の方向性についてアドバイスをもらい、次のように行っている。

(1) ポートフォリオによる評価

- ・ 授業内容をファイルにし、そこにこどもの声、先生のコメントが入る。
- ・ これを見れば授業の内容がすぐにわかる。→家庭との橋渡しにもなる。
- ・ 学習内容をプロセスで認識させる。

以上の内容が整理できるスクラップブックを一人ずつ配布し、活用している。

- (2) スタンプカードを作り、達成状況に合わせてシールを貼っていく。子どものがんばりへのきっかけ作りとして。
 - (3) 定期的に振り返りシートで自己評価をし、指導者もそれにより次の指導に役立てる。これもスクラップブックに整理する。
 - (4) 授業をビデオに撮り、ポイントになる部分を編集し、英語部会で振り返りを行い、今後の授業に活かしている。
- ⑤ピクチャーカード、フラッシュカード、絵本、ごっこ遊びグッズなど豊富な教材がそろっていて、毎回活用している。また、英語の歌、チャンツ、ビデオ教材、パワーポイント教材もこの1年蓄積できてきた。誰でもいつでも引き出せて活用できる環境作りを目指す。

【3】今後の課題

- ①英語活動の中で、前・中・後期の交流の場を持つ。たとえば、中期生が自分で作った絵本を前期生に読んで聞かせるとか、前・中・後期生が一緒に行事に取り組むなど共に学び合う場を作っていく。年度当初の目標にも掲げていたが、十分実現させることはできなかったのので、来年度への大きな課題としたい。
- ②来年度相当数の生徒増が見込まれる状況で、今年度と同じ態勢でいくのはかなりむずかしい状況にある。来年度は全単学年のクラス編成として、今カリキュラムの再編成を行っている。
- ③評価の方法については今年度ポートフォリオとしてスクラップブックを用意したが、学年によって差も出てきている。今年の分をそのまま来年度に引き継いで使っていく予定である。また振り返りについても今年度は各単元の終わりに振り返りシートを使い、それをポートフォリオ用ブックに貼ったが、来年度は、毎時間、項目を減らしふりかえりをおこなっていききたい。また、保護者にも、懇談等で知らせていきたい。
- ④一番困難な問題であるが、ALTも含めた打ち合わせの時間が十分とれていない現状である。真田先生の来校日を変更したり、授業案を前の週に作成し、前もって担任に目を通してもらうなど様々な工夫をしてきたが、来年度も困難が予想される。しかし何とか工夫をして授業者どうしの前もっての打ち合わせの場を作れるようにしたい。
- ⑤校内の研究授業を含めた研修の機会を持ち具体的な内容で英語活動の研究をしていく。
- ⑥学校外の研修に参加し視野を広げ、それぞれの指導に役立てる。

■ Unit 3 色と形で遊ぼう④ (No. 10)

■ 指導目標 : いろいろな形を使って何かを作る –タングラムを使って–
自分の作ったものを発表できる

過程	活動内容	指導上の留意点
Warm-up 10 min	<p>HRT Let's enjoy our English Class! First, let's sing "Hello song". 子どもたちと歌を歌う (パートに分かれて)</p> <p>HRT: ALT と挨拶する How are you? ALT: greet children. How are you? HRT: 夏休みについて ALT に質問 How was your summer vacation? ALT: talk about summer vacation Ask children about their summer vacation</p>	<p>HRTはALTと元気よく挨拶する ALTが子どもたち一人ひとりと挨拶する</p> <p>日本語でよいので、子どもたちから夏休みの思い出を聞きだす。英語にできそうなところを英語にする。</p> <p>*新しいお友達の紹介</p>
Review 10 min	<p>■ 形の復習① review shapes HRT Can you make a triangle with your fingers? ALT Can you make a Square(四角)・rectangle (長方形) ・circle(丸)?</p> <p>■ 形の復習② review shapes HRT What shape is it? (ホワイトボードに○・□などを描きながら) 描いた図は残しておく (丸・四角・長方形・三角・星・ハートなど) ALT Let's play はえたたきゲーム (haetataki game) ! HRT グループ1～4に分ける (make 4 groups) 代表一人が前に出るように指示 代表にハエタタキを渡す 言われた形をハエタタキで叩くルールを説明 ALT BIG circle!</p>	<p>聞いて思い出すことが目的 さっと復習</p> <p>大きな丸・小さな丸 Big circle/ Small circle Big square / small square というように絵を描いていくとよいかも</p>
展開 10 min	<p>■ タングラムで形作り HRT タングラムを配布、指示通りに切らせる タングラムを使って何かを作り、台紙に貼つてものをみんなの前で発表することを伝える ALT Demonstration Ok, I use a small triangle and a big triangle..... (please make something with shapes) HRT Can you make something with these shapes? Let's try!</p>	<p>準備物 * タングラム * ノリ * 台紙 (A4のコピー用紙)</p>

	子どもたちが作れているか見て回る 台紙に貼る手伝いをする	
展開 発表 15 min	<p>■ 発表</p> <p>HRT What did you make? Wow! That's great!</p> <p>ALT How many triangles did you use? (Ask questions about what they make)</p>	<p>HRT 何を作ったのかという質問をして子どもたちの自己表現を助ける</p> <p>ALT 形に関する質問 (Ask questions about what they make and shapes)</p>
あいさつ	<p>■ Good bye song を歌う</p> <p>HRT Let's sing good bye song. Good bye, see you!</p>	Good bye song を歌う

3・4年生「色と形で遊ぼう」

← できた作品の発表

タングラムで形作り



1・2年生「Teddy Bear パズルを楽しむ」

1・2年生「色の言い方を知る」
ペットボトルの中身の色は？



← 6年生「カレンダーを作ろう」
自分の誕生日を言う

振り返りシート

6年

名前 _____

テーマ カレンダーを作ろう

いえるかな？



★ 顔に○をしましょう



よくできた



まあまあ



う～ん…

■ 積極的に活動に取り組めた



■ 友だちと協力できた



■ 英語での月の言い方が言えた



自分が生まれたときのことって知ってる？

感想を一言。必ず書いてね。（楽しかった活動や自分ががんばったことなど）

5年 英語活動学習指導案

授業者 平松 真咲

ミゲル・トレス・スアレス

英語教室

- 1 日時・場所 平成21年(2009年)2月2日(月)14:00～14:45
- 2 学年 5年(7人)
- 3 単元名 外来語を知ろう (英語ノート 5年 Lesson 6)
- 4 単元目標
 - ①身近な外来語に興味を持つ。
 - ②積極的に好きなものをたずねたり、注文したりする。
 - ③日本語と英語の発音の違いに気付く。
 - ④友だちと協力し、コミュニケーション活動を楽しむ。

5 指導にあたって

本学級の児童は、いろいろな物事に興味関心を持っており、何事にも前向きに取り組む姿勢が見られる。他教科の授業では、ひとつの発問について、みんなが一斉に手を挙げることもあり、自分の考えや体験を他の人に聞いてもらいたい、という気持ちを強く持っている児童が多い。英語活動においても、おおむね積極的に参加できている。早くから英語に親しんでいる児童と、ほとんど初めての児童とがいるため、1学期などは授業を進めにくい場面もあった。しかし最近では、英語活動の趣旨が伝わったのか、みんなが楽しみながら活動に参加できているようである。

本単元は、英語ノート試作版のLesson6[外来語を知ろう]の教材を使いながら①「日常使っている言葉の中に様々な国から伝わってきた外来語があり、外来語とそのもとになる言葉との発音の違いの面白さに気付くこと」②「積極的にコミュニケーションをとる楽しさを体験し、自分の思いをはっきりと伝えることの大切さを知ること」③「人や物が行き来することにより、言葉も行き来し、作られていくという言葉の面白さを感じ取ること」を学ばせることをねらいとして授業が組み立てられている。

さらに、1学期から英語ノートのテーマにあった絵本の読み聞かせを行っている。絵から物語を推測しながら聞く姿勢も養われつつある。また読み聞かせは児童の話聞く態度の育成にも一役かっている。

コミュニケーションをとる場面に於いては、スキルを学ばせるのではなく、日常的な場面の中で、身ぶりや英語を使って意思の伝達をし合う楽しさを感じさせることを目標としている。また、やりとりの場面をすぐに設定しないで、何度か繰り返し練習する場面を設け、自信を持って発言させるよう留意していきたい。このようにして少しずつコミュニケーションの素地を養っていき、さらに中学校の英語活動でのコミュニケーション能力の育成へと繋げていきたい。

6 指導計画(全4時間 本時3/4時間)

- ・ 第1時 外来語とそのもととなる語とでは、音が違うことに気付き、英語の音に気をつけて発音しようとする。
- ・ 第2時 尋ねられ自分の欲しいものを頼む言い方を知る。
- ・ 第3時 尋ねられ自分の欲しいものを頼む言い方に慣れる。(本時)
- ・ 第4時 欲しいものを尋ねたり、要求したりして、友だちのフルーツパフェを作る。

7 本時について

① ねらい

- ・ 身につけるものの復習
- ・ 日本語の発音と英語の発音の違いに慣れる。
- ・ 自分の欲しいものが英語でいえる。
- ・ 友だちと協力し、コミュニケーション活動を楽しむ。
- ・ 絵本の読み聞かせを楽しむ。

② 本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
Warm-up 10 min	ALT HRT と挨拶する 子どもたち一人ひとりと挨拶する How are you? ■ Please game (身に着けるものの復習) Simon says と同じゲーム ALT How to play を説明 Touch your socks, please. Touch your shoes, please. Touch your shirts. (don't touch)	HRT は ALT と元気よく挨拶する ALT が子どもたち一人ひとりと挨拶する Lesson 5 の復習 【留意点】 TPR の活動で身につけるものの復習をする	・積極的に取り組んでいるか
復習① 5min	チャンツ (英語ノート p36、37) HRT 日本語の発音 ALT 英語の発音	【準備物】 CD-R	・音の違いに気付き発音できているか
復習② 10 min	■ 記憶ゲーム ALT お客 HRT 店員 子どもたちは注文された食べ物を覚えて、会話が終わったら注文された絵カードを選び並べる HRT 「ミゲル先生がお客様。何を頼んだのか覚えておいてね」 2、3名のグループに分ける メニューの食べ物絵カードをそれぞれのグループに配る。 「ミゲル先生が頼んだ食べ物の絵カードを注文が終わって先生の合図があってから並べてね。覚えておけるかな」 HRT ・ALT 注文の場面をする 店員 What do you want? 客 I want soup, steak, cake, and coffee, please. 店員 Soup, steak, cake and coffee. OK.	【準備物】 * 食べ物絵カード 【留意点】 答えの確認の部分はHRTがリピートしながらていねいに行く。	・グループで協力できているか ・英語の音の違いを意識して言えているか
展開 10min	レストランごっこ HRT ALT が店員になる 子ども一人一人が、お客になり、食べ物を注文していく。 * 買ったものは次回みんなの前で発表する (ショー・アンド・テル) ことの予告	【準備物】 * 食べ物絵カード * トレイ 【留意点】 体験的に学ぶことができるように、実際に注文する場面を設定する	・友だちと協力してごっこ遊びができているか ・注文する時には目を見て、相手にわかるように言えているか
絵本 10 min	■ Froggy gets dressed ALTによる読み聞かせ	【準備物】 * 絵本 【留意点】 ゲスチャーをつけるなど児童の理解を助けるような工夫をする。	
終わりのあいさつ	ALT HRT Good bye! See you!		

3 とどろみタイム

(1) 目標

コミュニケーション科、英語活動科で学んだスキルをもとに、いろいろな人との交流やさまざまな体験を通じて生き方を学ぶ

とどろみタイム（新教科）の研究開発について

自己を見つめ、生き方を考える「自己の確立を図る力」を育てていくために新教科では地域の人々との交流、体験学習を通して社会や地域の良さ、伝統産業を体験理解する活動などを学習の柱とした。その学習の中で自己の良さ（自己肯定感）を発揮したり、責任をもって役割を果たすことを通して「社会に参加することの喜び」「社会で生きている充実感」「社会貢献への喜び」など人としての「生き方」を学び、考えさせ、感じとらせることが大切であると考えた。

そのため、本校でこれまで総合的な学習の時間に実施してきた内容も考慮し、「生き方を学ぶ」学習と新たに位置づけ、小・中一貫校として指導方法、教育課程を研究、開発をしている。

(2) 内容（育てたい力・つけたい力）

① コミュニケーション能力に関わること

- ・ 必要な情報を収集し、分析する力
- ・ 自分の考えをわかりやすく表現する力

② キャリア教育に関すること（自分自身、他者、社会に関すること）

- ・ 自分を見つめ、将来を見通す力
- ・ 地域を見つめ、社会の仕組みを理解する力
- ・ 友達と協力して課題を解決する力
- ・ 自分の夢や進路の実現に向け社会活動に参加する力

(3) 各学年の主な取組

1年生・2年生

2年生とともに、『地域理解学習』・幼稚園との交流として、「菜の花畑の見学」や「森町公園での遊び活動」、「水遊び」などをしてきた。また、幼稚園児や小学生、中学生にもよびかけた「お店やさんごっこ」や幼稚園の体験入学をかねた「フェスティバル」などにも取り組んだ。ほかにも2年生は5年生との協同で「お米作り」に取り組んだ。

2年生はリーダーとして活躍し、1年生は「次は、ぼくたち・わたしたちもがんばるぞ」という気持ちが伝わってきた。教師同士の打ち合わせは、以前より少し遠くなったこともあり、時間的にも大変であったが、園児の様子もよくわかった。

3年生

3年生は主に、『地域理解学習』として、止々呂美の特産物の学習をしてきた。「びわの袋かけ」「山しょうのたる漬け」「くりの選果」などの見学や7年生と4年生との協同で「炭焼き体験」に取り組んだ。

必要なことをメモしたり、それをまとめる力や発信する力がついてきた。

4年生

4年生は下水処理場や上水場、クリーンセンター、郷土資料館などの見学を通して、箕面市や大阪府の施設の働きを学習してきた。また、障がい理解として、聴覚・視覚障がい者の話を聞いたり、アイマスク体験などをすることにより、「みんなが手をつなぐために」必要なことを学習してきた。

見学するごとに、相手の話の要点をメモし、それを新聞や紙芝居などで楽しみながら、発表する姿が見られた。

5年生

5年生は2年生と協同で「米作り」に取り組んだ。地域の方に「苗作り」から「稲刈り」さらには「草刈」「害虫」の学習など行った。そして、一月には取れたお米で「収穫祭」を行った。また、環境学習にも取り組んだ。さらに、6年生との協同で地域の食堂や施設に出かけ、歌や演奏を披露する「出前コンサート」の取組にも積極的に取り組んだ。

何事に対しても、積極的に取り組もうとする姿が見られた。

6年生

6年生は修学旅行に向けての平和学習に取り組んだ。夏休みの平和登校日には、自分たちが学んだことを紙芝居やパワーポイントにまとめ、幼稚園児にもわかるように工夫し報告した。縦割りのグループで、目的地や交通手段を考え目的地に行く「探検発見アドベンチャー」や地域に出かけ歌や演奏をする「出前コンサート」の取組にも積極的に取り組み、常にリーダーとしての行動をとることができた。

7年生

7年生は『地域理解学習』を学習の中心とし取り組んだ。地域の産業である「炭焼き」を題材に炭の調べ学習から始まり、柴作り、原木切り出し、窯温め、窯入れ、窯出しなど全ての行程を体験学習した。

8年生

8年生は『世の中理解学習』を学習の中心として取り組んだ。地域の産業以外の職場を体験する職場体験学習を実施した。それぞれの生徒が自分の進路と関連づけ3日間、様々な事業所で仕事を体験した。

9年生

9年生は『世の中理解学習』を学習の中心として取り組んだ。修学旅行で訪れる沖縄の平和学習からはじまり、JICA 大阪訪問へとつながる国際理解・共生学習を実施した。

7～9年生

中学校全体でそれぞれの学年が中心となって学習したことを発表する学習を『表現活動』と位置づけ行った。それぞれの学年がPCを活用したり、クイズを取り入れたりしながら聞き手を意識した発表を行った。

- (4) 小学校1年生から中学校3年生まで一貫した共通の具体的な取組（題材）について
本校では地域の伝統産業である「炭焼き」を総合的な学習の時間に小学校3、4年生、中学生対象に体験学習をおこなってきた。小・中一貫教育を進めていく中でこれまでも、小学校の1、2年生の生活科、小学校の総合的な学習の時間、中学校の総合的な学習の時間に実施する取組を踏まえ継続発展的なつながりになるよう考慮してきた。しかし、今回の新教科の研究をするにあたり、小・中9年間の流れ、つながりをより明確にするために全学年に同じ時期に「炭焼き」を題材の中心にすえ、地域理解学習として下記のようにカリキュラムを編成し、一部を除き実施できた。

【1、2年生】2時間

炭盆栽作り（炭盆栽をのせる受け皿の「絵付け」）

【3、4年生】2時間

炭盆栽作り（炭盆栽をのせる受け皿作り「陶芸」）

【5、6年生】

炭盆栽作り（炭盆栽に植えつける植物の採取、栽培）

【7年生】16時間

炭焼き体験（柴づくり、原木作り、窯入れ、火入れ、窯出し）

【8年生】2時間

炭盆栽作り

【9年生】4時間

炭盆栽販売（企画、マーケティング、販売戦略など）

- (5) これまでの成果

これまで本校で取り組んできた総合的な学習の時間に実施してきた内容を取捨選択し、学習内容を『地域理解学習』『世の中理解学習』『表現活動』の3つのカテゴリーに分け、新教科としてカリキュラムを編成した。

そのカリキュラムに基づき授業を展開することにより、地域の人々や社会との関わりの中で、自分のよさを発揮したりする機会が増えた。また、小・中学生が共通した題材に取り組むことにより、自分の成長モデルとして上級生を手本とすることができ、先を見通すことができるようになり、発達段階に応じた責任をそれぞれが果たす機会が増えた。その結果、やりがいや達成感を実感させることができ、生き生きとした児童・生徒の様子が見られるようになった。また、小・中学校に共通する題材『炭焼き』を取り入れることにより、小・中学校の教職員が授業展開などお互いの良いところを取り入れることができ学習が深まった。

◇学習を通しての子どもの感想

- ・学校が新しくなり、新しい人が来た人が地域の伝統産業である炭焼き体験をしていい経験になった。
- ・普段できない炭焼き作業ができ、楽しかった。
- ・地域の産業のことがわかってよかった。
- ・他の学年の人たちが学んでいることが分かってよかった。

- (6) 今後の課題

今年度新しくカリキュラムを編成し、新教科としてスタートした。実際に学習を展

開していく中で、題材によっては思うような成果が実感できなかつたり、時間配分を考え直す必要が感じられたものもある。また、今後はそれぞれの学年で実施している題材を「炭焼き」のように学習内容を9年間の一貫教育という視点でもう一度練り直し、もっと学年のつながりや学習効果を考えカリキュラムに反映させていくことである。

そしてコミュニケーション科や他の教科とも連携を図り、「とどろみタイム」での学習をより効果的にしていけば新教科「とどろみタイム」の学習目標が達せられると考える。

IV 研究開発の効果

1 児童・生徒への効果

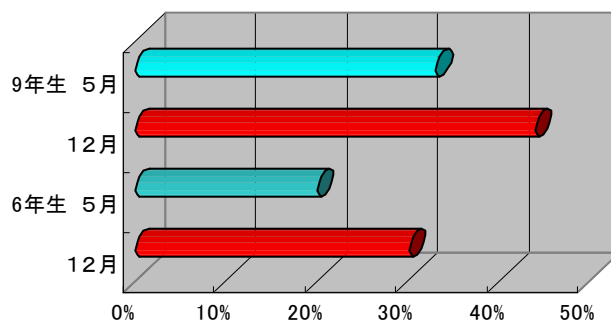
コミュニケーション科においては、「人間関係づくり・自己肯定感」「発表力」「表現力」「情報教育・メディアリテラシー」の4つの観点で取組を進めてきた。

とりわけ、個と集団の関係性に基づく人間関係づくりの促進と自己肯定感の向上を図ることは、すべての活動の土台となることから、学年はもとより学年を超えた取組、中期後期合同の取組（5年生～9年生等）など様々な場面において多様な活動を展開してきた。その成果の一端は右図に示されており、今後、より系統だったプログラム作りに取り組むことにより、さらに自己肯定感の向上をめざしていきたい。

また、「発表・表現」の観点も、どの教科、領域の活動にもつながるものであり、スピーチ、作文発表会、話し合いや、表現ワークショップ等をおこなってきた。子どもたちの発表・表現することに対する喜びや楽しさなどは、日々の作文や日記等に日常的に表わされている。

さらに、今年度初めて箕面市中学生弁論大会に7年生(中学校1年生)が出場し、審査委員長特別賞を受賞したことも一つの成果と考えており、他の児童・生徒の大きな励みとなっている。今後とも、コミュニケーション科の4つの観点を柱として、9年間の育ちを見据えたカリキュラムの充実やプログラムの開発に取り組み、次年度はさらに大きな成果を生み出していきたい。

自分にはよいところがあると思いますか





英語活動においても1年生から9年生の子どもたちが毎回楽しく授業に参加できている。初めて英語に触れる子どもたちもいる中で、ALTや英語活動をコーディネートする英語補助員はもとより、中学校英語科教員と小学校教員の効果的な連携のもと、子どもたちの英語活動に対する意欲・興味関心は大きく高まってきている。

【4年生の作文から】

私は4月とくらべたらとても変りました。どこが変わったかという声の大きさです。4月の頃は、とても小さな声だったけど、今では大きな声が出せます。4月の頃は、恥ずかしかったけど、大きな声を出せるようになってから楽しくなってきました。なので、とても英語のある日はわくわくするし、早くしゃべりたいと思ってきます。
 ……略……



同様に、「とどろみタイム」においても子どもたちは積極的に取り組んでいる。コミュニケーション科や英語活動で培ったスキル等をもとに、異年齢集団による活動等において、年長者は年少者に対する思いやりやさしさをはぐくみながら、「他者に必要とされている自己」（自己有用感）を実感してきている。

また、アフリカの方々（フランス語圏）との交流において、とまどうことなく英語や中学生はフランス語を使ってあいさつするなどのコミュニケーションをはかり、異文化との触れ合い、つながりも積極的に体験し、「コミュニケーションを楽しみ、自己を発見できる自分」を少しずつ形成してきている。

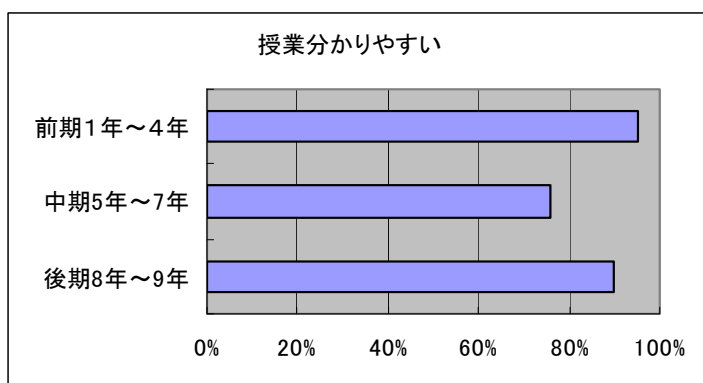
2 教職員への効果

本年度研究組織を立ち上げた際に、4研究部会（コミュニケーション部会・英語活動部会・とどろみタイム部会・授業改革部会）を設置し、図書館司書や事務職員も含む教職員

がそれぞれの部会に所属して研究に取り組んできた。幸い本校は管理職4人体制なので、管理職も4部会の一員となり、ともに研究に取り組んだ。加えて4部会の代表者と管理職、校務分掌各部代表者からなる研究推進会議も設置し、部会調整と全体の進捗状況の確認等を行ってきた。

一方で、本校は施設一体型小・中一貫校として平成20年度に新設移転した学校であり、学校運営体制や学校行事等新たに対応すべき課題も山積しており、加えて従来からの一貫教育の研究も並行して取り組んできたことから、会議や研修の増加、個々の研究の推進と、教職員の負担は確実に増えてきている。しかし、本研究開発が子どもの課題に対応するものであるという認識は共有できており、どの部会においても常に熱心な議論が積み重ねられてきている。

現在、物事を新たに創りだすことの苦しさを味わいながら、約1年間試行錯誤を繰り返してきた中で、ようやく進むべき方向性の確かな手ごたえを教職員一同が実感しているところである。何よりも、小・中学校の教職員が毎回「子どもや学校の現状と課題、そして

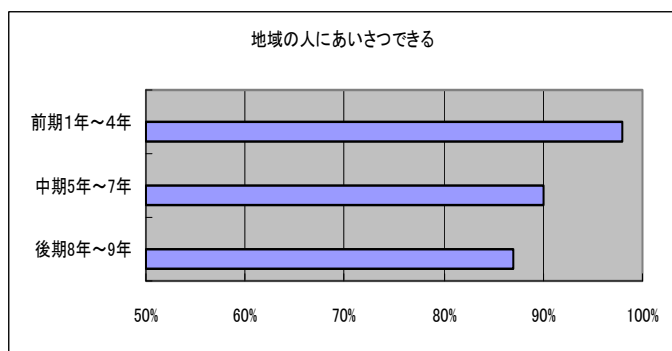


方向性」を共有するための議論を積み上げることにより、確実に学校総体のベクトルを一つにすることができ、日々の教職員の実践に生かされてきている。例えば、各教科でコミュニケーションを意識した授業づくりや教材づくりが盛んに行われるようになり、子ども相互の交流を軸とした、わかりやすい授業が展開されてきている。

具体的には、

- (1) 教科ごとにコミュニケーション科の4観点に基づく一貫カリキュラム素案の作成
- (2) 交流を意識した授業づくり：話し合い、討論→模擬裁判での意見交流 KJ法による意見調整
- (3) ICTを活用した授業づくり：体育等で他者の演技や活動をみでの意見交流
- (4) 横断的合科的な授業づくり：俳句づくりにおいて、自分で撮影した映像をPCで編集、発表など、各教科においてもコミュニケーションと自己の確立を意識した授業が実践されてきており、研究開発における新しい教科づくりだけでなく、教育活動全般にわたる波及効果ができているととらえている。

3 保護者等への効果



保護者には学校便りや学年通信等を通じて研究開発学校として取り組む方向性や具体的な内容を周知するとともに、ゲストティチャーや学校支援のサポーターとして様々な活動に参画いただいている。その際、子どもとの対話、マナー等コミュニケーションを意識した対応をお願いしたり、意識したお話や活動の展開にご協力をいただいている。また、日常的な

「見守り活動」においてもあいさつや声かけ等地域全体にお願いし、子どもたちのコミュニケーション力を高めるためにご協力をいただいている。加えて、本年度PTA活動においても「コミュニケーション」を意識した取組を実施することになり、新たにスポーツを通じた交流や自然体験活動親子交流など、学校と同調した取組の展開を進めていただいている。

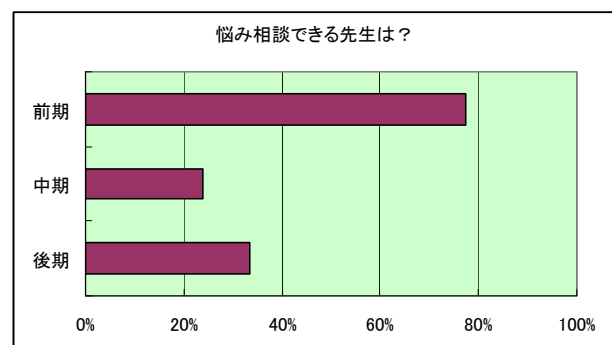
V 実施上の問題点と今後の課題

- 1 小・中一貫校としての新たな開校に向けて校内組織の検討を進めていたが、研究開発に向けての組織作りとの整合性がうまく取れず、今年度前半は教職員間で混乱があった。一部修正して研究を進めてきたが、これからも状況に応じて微調整していく必要がある。
- 2 これまでの少人数から確実に人数が増える中での取組となるが、一人ひとりを大切にしてきたこれまでの姿勢を崩すことなく、新しい状況に対応できる体制や教材づくりを進める。
- 3 今年度はカリキュラムの内容の検討からのスタートとなり、子どもたちの活動等は2学期以降からになった。次年度は今年度作成した年間予定にしたがって実施していくことになるが、十分に検証できていない部分があるので、周到な準備と事後の丁寧な検証が必要となる。検証の際には児童・生徒の振り返りとともに教員の振り返りもていねいに行うなど、効果測定を継続的、意識的に行う。

また、評価についての研究が十分にできていない。ポートフォリオによる評価にとどまらず、わかりやすい評価についての研究を進めていく。

- 4 小・中一貫した9年間の教育課程を編成するうえで、発達段階に応じた課題や教材の配置になっているかの検証が必要。
- 5 コミュニケーション科のスキル学習について、教職員がさまざまなスキル学習に対応できるように研修の機会を設ける。
- 6 コミュニケーション科で学んだことが他教科で活用できるような有機的な運用方法を考えていく。
- 7 他教科の授業も教員と児童・生徒とのコミュニケーションを大切に授業になるよう研鑽を積む。
- 8 英語活動科ではHRT（学級担任）主体で授業を進めていける状況にする。また、英語活動科の教材を蓄積、整理し、誰でも、いつでも使える体制にする。
- 9 とどろみタイムではこれまでの取組を整理し、地域に根ざし、コミュニケーション力を高めることをめざしたより有効な内容を検討する。
- 10 保護者や地域への情報発信をより積極的に行い、理解、協力を得て研究を進める。

- 11 12月に関西福祉科学大学健康福祉学部の大川尚子准教授のご協力で、小規模校における「ストレス状態に関する調査」を実施した。その結果から、小学校男子で母親、担任教員、友達のソーシャルサポートがやや弱いため、抑うつ・不安、不機嫌・怒り、無力感といったストレス症状がやや強く、中学校女子で父親、母親、担任教員、友達のソーシャルサポートがやや弱いため、抑



うつ・不安、不機嫌・怒りといったストレス症状がやや強いとい傾向がみられた。

また、その調査の生活状況調査で、「悩みを相談できる先生は？」の項目では肯定的な答えが中期・後期で低く、「自分のこと分かってくれる先生は」の項目でも中期・後期では半数程度という結果が出た。このことから児童、生徒と教員とのコミュニケーションの関係もより深めていかなければならない。ファシリテーションやキャリア・カウンセリングの研修などを活用して、教師自身のコミュニケーション能力の向上にも努めていかなければならない。

